【もろびとこぞりて】

《新聖歌76番》

［イングリッシュ・ハンドベル・クリスマスコンサート］

《ショートメッセージ》

『ヨハネの福音書』

1章1～9節より

熊　谷　徹

2014年12月6日（土曜）

【序】新聖歌76番「もろびとこぞりて」；

今ハンドベルの演奏で歌ったのは「**もろびとこぞりて**」というクリスマスの讃美歌である。今日のハンドベル・クリスマスコンサートでこの曲を演奏すると聞いたので改めてこの曲のCDを聴いてみた。歌っているのは私の高校の後輩で、日本を代表するソプラノ歌手・鮫島有美子さんである。いつ聞いても胸に染み透る、実に美しく素晴らしい歌声である。この讃美歌の曲は大作曲家ヘンデルのオラトリオ「メサイア」から採られている。作詞はヘンデルと同時代の牧師フィリップ・ドッドリッジである。今日はこの讃美歌を素材に、クリスマスの意味についてお話したい。

【1】「久しく待ちし主は来ませり」（第1節）；

このキャロルは「**もろびとこぞりて**」という歌詞で始まる。「すべての人よ、一緒に喜び歌おうではないか」という呼びかけである。「**ひさしく待ちにし主**」とは「ずっと待ち望んでいた救い主」という意味である。「**来ませり**」は「おいでになった」という意味である。人類がずっと待ち望んでいた救い主がこの世にやって来た。その救い主がイエス・キリストであり、そのお方の降誕を祝うのがクリスマスである。

【2】「たえなる光の主」（第3節）；

（1）第3節に、「**この世の闇路**」とある。「闇」という漢字は「門」の中に「音」と書く。この「音」という字は、「暗い」という字からその左側にある「日」という字を取り去ったものである。「暗い」ところから「日」即ち太陽を取り去ったら更に暗くなる。それが「闇」という文字である。この文字が表していることは象徴的である。それは私達の心を指し示していると言えるからである。「門」を私達の「心の門」だと考えてみれば良い。あなたが心の「門」を閉ざせば、心は暗くなり、そのままにしておいたら心は「闇」になる。では「闇」を追い払うにはどうしたら良いか。「門」を開ければ良いのである。門を開けて外の光を入れれば良い。そうすれば心の闇は消え去る。そしてその光となって下さるのがキリストなのである。

（2）キリストについてドッドリッジは「**たえなる光の主**」と歌う。「**たえ（妙）なる**」とは

「絶妙な、とびきりすぐれた」という意味である。「**妙なる光**」であるキリストについてヨハネはこう言った;「**初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。…この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。**」(ヨハネ 1:1-5)。人の心を覆う「**闇**」を打ち払い、全ての人に「**いのち**」と「**光**」をもたらす「**妙(たえ)なる光の主**」キリストがお生まれになった日、それがクリスマスである。救い主が到来したことの喜びを、この讃美歌は「**主は来ませり、主は来ませり**」と繰り返し歌うのである。

【3】「恵みの露おく主」(第4節);

第4節では、「**しぼめる心の花を咲かせ、めぐみの露おく主は来ませり**」と歌われる。ドッドリッジの原詩を直訳するとこうである;「**傷ついた心を包帯で包むために、血を流している魂を癒すために、彼はやって来る。その恵みの宝で、へりくだる貧しき者を豊かにするために、彼はやって来る**」。

実はこう歌ったドッドリッジ自身が多くの悲しみ苦しみを味わった人だった。彼は生まれた時、殆ど息をしていなかった。誰もが、助からないだろうと覚悟した。幸い助かったが、8歳の時に母親が世を去った。そして僅か4年後に父親も死んでしまった。そういう悲しく辛い経験をしたのである。

母は彼を牧師にしたいと願っていた。その願いの通り彼は牧師になった。そして数百に及ぶ讃美歌を作った。その彼が33歳の時に作ったのがこの讃美歌「**もろびとこぞりて**」である。これを作った16年後に彼は天に召された。

彼が第4節で歌ったように、キリストは、「傷ついた心を包帯で包み、傷だらけの魂を癒し、恵みの宝で私達の心を満たすために」、来られた。キリストは、「**しぼめる心の花を咲かせ、めぐみの露おく主**」なのである。

【結び】天使の歌声;

それでは引き続き「天使の歌声」と形容されるイングリッシュ・ハンドベルの妙なる調べ耳を傾け、静かな良きひと時をお過ごし下さい。◇